『年報 地域文化研究』
第 26 号（2022 年）
2023 年 3 月 31 日発行

# 全体性、差異、潜在性
## ジャン・イポリットに対する応答としての、初期ドゥルーズによるベルクソン論

長谷川　朋太郎

### はじめに

ジル・ドゥルーズ（1925-95 年）のベルクソン論、あるいはドゥルーズ哲学におけるベルクソンの位置はこれまで、数多くの毀誉褒貶に晒され続けてきた。ドゥルーズとベルクソンの関係を語るにあたって、とりわけ避けて通れない著作がアラン・バディウ『ドゥルーズ　存在の喧騒』である。同書においてバディウは、「全体としての〈一〉(Un-tout)」の焼き直しにすぎないものとして、ドゥルーズ哲学を強く批判する。バディウの見るところ、そうした焼き直しを実行するにあたってドゥルーズの取った戦略が、「ベルクソン的系譜を引き受け、それを現代化する」というものだった。「ドゥルーズはベルクソンの魔術的読者であって、スピノザよりも、あるいはおそらくニーチェよりも、ベルクソンはドゥルーズの本当の師である[1]」というバディウの言葉は、研究者の間では広く知られたものだろう。

その後の研究は、バディウが述べたようなドゥルーズとベルクソンとの密接な関係を、ある意味ではそれとして引き受けながら、「全体としての〈一〉」には回収されないようなドゥルーズ哲学（あるいはドゥルーズのベルクソン論）の含意を拾いあげることを目指して進んでいった。とりわけ焦点となったのが、潜在性の概念である。フランソワ・ズーラビクヴィリはそれが、「与えられていないものの審級」であることを強調しつつ、「潜在的なものがあるということは、まずもって全体が与えられておらず、与えられることができないということを意味する[2]」と述べる。『ベルクソンの哲学』において檜垣立哉は、ドゥルーズのベルクソン論を明示的に参照しながら、ベルクソン哲学の輪郭を明確化する作業を行った。杉山直樹の述べる通り同書は、「多くの研究を古いものにし、それと同時に、続く者たちが共有できる基盤を用意した[3]」。檜

---

[1] Alain Badiou, *Deleuze. La clameur de l'Être*, Paris, Hachette, 1997, p. 62 (『ドゥルーズ　存在の喧騒』鈴木創士訳、河出書房新社、1998 年、64 ページ). フランス語の文献から引用する際は、参照した邦訳の書誌情報とページ数を括弧で併記したうえで、それらを十分に参照しながら、最終的には著者の責任で訳出した。

[2] François Zourabichvilli, *Le vocabulaire de Deleuze*, Paris, Ellipses, 2003, « Virtuel », p. 89.

[3] 杉山直樹「解説」、檜垣立哉『ベルクソンの哲学　生成する実在の肯定』講談社学術文庫、2022 年、299

垣もまた、潜在性の語をとりわけ重要視しながら、自らのベルクソン解釈を提示している[4]。

しかしながら両者の関係は、とりわけ近年の研究において、根本的な疑義を呈されつつある。『ドゥルーズ『意味の論理学』の注釈と研究』において鹿野祐嗣は、ベルクソンについてのそれを含むドゥルーズのモノグラフィー群と、ドゥルーズ独自の思想体系の開陳である『差異と反復』や『意味の論理学』とを峻別するという観点から、両者の混同を厳しく戒める。『差異と反復』について扱った「序論」において鹿野は、同書でドゥルーズ自身が練り上げた潜在性の概念が、それ以前にベルクソンを通じて練り上げられたものとは根本的に異なることを指摘しつつ、もってバディウのドゥルーズ批判は当たらないと主張する[5]。一方、ベルクソン哲学の解釈者からも、ドゥルーズのそれに対する真正面からの批判が提出されている。「潜在性とその虚像」において村山達也は、『物質と記憶』における「潜在的／性」の語を逐一検討したうえで、ベルクソン自身がその語を哲学的な概念として用いているわけではないことを示しつつ、最終的に「ドゥルーズが『ベルクソニズム』のなかで潜在性について論じている箇所は、できるだけ無視した方がよい[6]」とまで述べている。

こうした研究の進展を踏まえたうえで、我々がまずもって明らかにしたいと考えているのは、なぜドゥルーズはかくも奇妙な仕方でベルクソンを読んだのか、という点である。とりわけ「潜在性」の概念に代表されるように、ドゥルーズのベルクソン読解がある明確な方向性を備えたものであるという事実は、いまや疑い得ないだろう。そしてその方向性は、ベルクソンの純粋な読解と相対的には別のところで定められたものである――ベルクソン研究者の多くがドゥルーズの解釈に抱いている違和感の、根本はそこにあるのではないだろうか。

上記の問いに答えるべく本稿は、ジャン・イポリット（1907-68 年）によるベルクソン批判に対する応答という観点から、ドゥルーズのベルクソン論を読み直すことを試みる。以上の観点は既に、ジュゼッペ・ビアンコが採用しているものであって、本研究に独自のアプローチの仕方ではない[7]。一方、ビアンコの研究に対して本稿は、イポリットとドゥルーズの批判的対決の内実を、ベルクソンの哲学に即して明らかにする作業に注力する。その作業を徹底することで

---

ページ。

[4] 「序論」において檜垣は、ベルクソンの哲学を「実在をあるがままに記述する試み」だと定義したうえで、ベルクソンの描くような実在が「潜在性」の語によって提示されると述べている（cf. 同書、「序論」、39 ページ）。

[5] 鹿野祐嗣『ドゥルーズ『意味の論理学』の注釈と研究――出来事、運命愛、そして永久革命――』岩波書店、2020 年、「序論」第 3 節。

[6] 村山達也「潜在性とその虚像――ベルクソン『物質と記憶』における潜在性概念」、平井靖史・藤田尚志・安孫子信編『ベルクソン『物質と記憶』を診断する』書肆心水、2017 年、32 ページ。

[7] Giuseppe Bianco, *Après Bergson. Portrait de groupe avec philosophe*, Paris, PUF, 2015, p. 270-274, p. 289-305.

我々は、ドゥルーズがベルクソン哲学を用いて全体性と差異の概念を書き換えようとしていることを明らかにしたい。実のところドゥルーズが提出する潜在性の概念は、ベルクソンを通じた全体性と差異の概念の書き換えの、端的な結果として提出される概念なのである。

第 1 節では、『論理と実存』第 II 部第四章を読解しつつ、イポリットがベルクソンにあてた二つの根本的な問いとして、①諸々の個物の関係＝差異を、否定性抜きに考えることは可能か、②（ベルクソン哲学において）二元論と一元論は矛盾なく両立しうるのか、を取り出す。我々の見るところ、初期ドゥルーズの三つのベルクソン論、すなわち「ベルクソン、1859-1941」、「ベルクソンにおける差異の概念」、『ベルクソニズム』でドゥルーズは、上の二つの問題に対する応答を、主要な課題として自らに課している。

ただし、1956 年に書かれた二つのベルクソン論（「ベルクソン、1859-1941」と「ベルクソンにおける差異の概念」）と 1966 年の『ベルクソニズム』の間には、微妙な違いが存在する。とりわけ目につくのは、ベルクソンの著作（とそれに対応する概念）を扱う順番が異なる、という点である。また、1956 年の二つの論文と比較して『ベルクソニズム』は、「潜在性／現働性」の対を一貫して強調する。これらの違いは、我々の見るところ、上で挙げた①と②の二つの問題の優先度に対応させて考えることができる。したがって、第 2 節では 1956 年の二つのベルクソン論に依拠して①の問題を、第 3 節では『ベルクソニズム』を読解しつつ②の問題を、それぞれ考えてゆくこととする。

## 1. イポリットによるベルクソン批判――『論理と実存』第 II 部第四章の読解

ヘーゲル『精神現象学』の仏訳およびその詳細な註解である『ヘーゲル精神現象学の生成と構造』（以下『生成と構造』）で知られるジャン・イポリットだが、ミシェル・フーコーやドゥルーズ、ジャック・デリダといった、その後活躍する哲学者たちを数多く指導した人物として、その哲学が近年とりわけ注目されている。

イポリットの哲学的主著にあたるのが、全三部から成る『論理と実存』（1952 年）である。よく知られている通り、ドゥルーズはその書評を 1954 年に書いており、同書との関係がとりわけ深い人物である。その中でも 1956 年に書かれたドゥルーズの二つのベルクソン論は、『論理と実存』に対する応答として読みうるということが、研究者の間でしばしば指摘されてきた。ビアンコは、『論理と実存』のなかでも第 II 部第四章を特権視しつつ、同章におけるイポリットの議論との批判的対決を通じて「ベルクソンにおける差異の概念」が書かれたことを強調している[8]。一方でビアンコの研究は、イポリットがベルクソンを具体的にどの点で批判しているの

[8] *Ibid.*, p. 292 ; Giuseppe Bianco, « Le Bergson de Deleuze entre existence et structure », Adnen Jdey (dir.), *Gilles*

か、明確な形で定式化していない。したがって我々はまず、『論理と実存』第 II 部第四章でイポリットが展開している議論を、ベルクソンの議論に戻りながら検討することとしよう。

「経験的否定と思弁的否定」と題された同章においてイポリットは、否定の問題、とりわけ事物のうちに否定は含まれるのかという問題をめぐって、ベルクソン哲学と真正面から対決する。『創造的進化』第四章においてベルクソンは、事物のうちに「無」や「否定」が存在しない、ということを主張した。これらの概念は事物それ自体ではなく、人間の思考のうちにその起源を求めなくてはならない。すなわち無が示すのは、あるべき場所にあるものがないという失望の感情であり、他方で否定が示すのは、別の肯定に目を向けるべきという他人からの警告である。

最終的にベルクソンは、否定の根源には人間の記憶力がある、と指摘するに至る。「経験の糸をただ単に辿っているような精神にとっては、空虚は存在しないだろうし、相対的であっても部分的であっても無は存在しないだろうし、可能な否定も存在しないだろう[9]」。この、「ある」だけが連続する精神に、記憶力、すなわち過去に執着する欲望を付与してみよう。このときはじめて精神に「否定」が生まれる、とベルクソンは言う。「あらゆる関心、あらゆる情感を取り去ってみるがいい。あとに残るのはもはや、流れる実在と、その実在が自らの現状について我々のうちに刻印するところの、無際限に更新される認識でしかない[10]」。

それに対してイポリットは、『生成と構造』から一貫して、否定の存在論的な意義について語り続けてきた。そんなイポリットが、事物のうちに否定を見て取ることを拒否したベルクソン哲学と対決することは、ある意味では必然だったと言える。

さて、ベルクソンと対峙するにあたってイポリットがまずもって強調するのは、事物が互いに区別されてある[11]という、それとしては極めてシンプルな事態である。「世界のうちに、諸々の異なった存在があり、それらの存在の間には関係がある[12]」ということ、このことは疑いを得ない事実だとイポリットは述べる。

実際ベルクソンは、こうした事実を認めているように思われる、とイポリットは主張する。

---

*Deleuze. Politiques de la philosophie*, Genève, MetisPresses, 2015, p. 142.

[9] Henri Bergson, *L'évolution créatrice*, Paris, PUF, 2013, p. 293 (『創造的進化』松浪信三郎・高橋允昭訳、白水社、1966 年、332 ページ).

[10] *Ibid.*, p. 294 (同書、333 ページ).

[11] Jean Hyppolite, *Logique et existence. Essai sur la logique de Hegel*, Paris, PUF, 1952, chapitre IV « Négation empirique et négation spéculative », p. 139.

[12] *Ibid.*, p. 141-142.

さてベルクソンは、切り離し区別するこの能力を、本当に我々の精神にだけ置いているのだろうか。ベルクソンにとっても、諸々の生きた身体と生の進化における諸々の方向性が、あるのではないだろうか。 […]ベルクソンが我々に対して、諸々の事物のうちに、存在のうちに、持続のうちに、そしてまた絶対的原理のうちに、諸々の分離や区別があるということを認めるというのならば、そのとき彼は宇宙と〈絶対的なもの〉それ自体のうちに、否定を導入しなくてはならなかった、ということになる。なぜならば、ヘーゲルがそのことを示そうとしたように、否定と区別とは互いに含み合っているからだ[13]。

『創造的進化』におけるベルクソンは、第四章において「無」や「否定」の観念を退ける一方で、第一章から第三章に至る自らの生の哲学を語る場面においては、事物のうちに、また絶対的原理のうちに、「諸々の分離や区別」を進んで認めているように思われる。そして、ヘーゲルが示したように「否定と区別とは互いに含み合っている」のだから、ベルクソンは否定の概念、とりわけその存在論的意義を、進んで認めるべきだった。以上が「経験的否定と思弁的否定」におけるベルクソン批判の、基本的な線である。続く箇所では「絶対的原理における否定」と「否定と区別の含み合い」について、詳細な説明が為されてゆく。

まずは絶対的原理について、イポリットがそこで念頭に置いているのは、『創造的進化』第三章における、二つの秩序の議論[14]である。そこでベルクソンは、「類を同じくしながらも互いに対立する二つの秩序がある」と述べる。すなわち、第一種の秩序＝「生命的なものの秩序、あるいは意志されたものの秩序」と、第二種の秩序＝「不活性なもの、自動的なものの秩序」である。イポリットがこれらを絶対的原理と名指している通り、『試論』から『物質と記憶』を経由して『創造的進化』に至るまでのベルクソン哲学は、一貫してこれら二つの秩序を問題にしてきたと考えられる。

そこでイポリットは、これら二つの秩序においてこそまさに、否定的なものがあらわれていると指摘する。なぜならば「創造的な秩序の反対の秩序はまさに、その逆転ないし否定として定義されるからだ[15]」。続けて彼は、次のように述べる。

生の哲学であるベルクソンの哲学において、こうした否定と否定性はおなじくあらわれている。一方で本能は知性を欠いているが、本能は自ら定立することのない諸々の問題を解

---

[13] *Ibid.*, p. 140. 傍点強調引用者。
[14] Henri Bergson, *L'évolution créatrice*, *op. cit.*, p. 223-227 (『創造的進化』、前掲書、253-258 ページ).
[15] Jean Hyppolite, *Logique et existence, op. cit.,* p. 142.

> くことができるだろう。他方で知性はとりわけ本能を、あるいは直観を欠いており、こうした欠陥を乗り越えようとしている[16]。

『創造的進化』においてベルクソンは、全体としての生が、植物／動物や本能／知性へと分化してゆくさまを描いた。結局のところこうした分化を描くにあたってベルクソンは、自身が同書の第四章で批判するところの「否定性」の議論を、二元性という形で密かに使ってはいないだろうか。端的に言えば、本能は知性を、知性は本能を、互いに否定しあっていると考えられるのではないか――これこそイポリットがベルクソンに対して投げかける問いに他ならない。

次いで「否定と区別の含み合い」について。経験的思考と思弁的思考を区別しつつ、経験的思考をイポリットは、事物における「内的差異ないし本質の差異[17]」を常に取り逃がす、と述べる。本質の差異とも言いかえられている通り、内的差異とはそのものをそのものたらしめている差異のことである。イポリットが定義を与えている箇所を引用してみよう。

> 対立は避けることができない。なぜならば、[…]各々の事物はほかの事物と、あるいはむしろほかのすべての事物と、関係のうちにあるからである。結果としてその事物の区別は、その事物の残りのすべてとの間の区別となる。この、事物の完全な区別こそが、それを全〈宇宙〉へと結び付け、諸々の差異を本質的で内的な差異（la difference essentielle et intérieure）へと帰着させる。そうした本質的で内的な差異は、ある事物の差異であって、ある規定とそれとは異なる規定とを分ける差異である[18]。

ある事物の本質的な差異＝内的差異に至るためには、その事物が「残りのすべて（tout le reste）」とどのように異なるのかを考えることにほかならず、したがってその事物をそれ以外のすべてのものとの「対立（l'opposition）」へと置きいれる差異のことを指す、とイポリットは述べている。

ここで明記しておきたいのは、ある事物と別の事物の関係、すなわち両者の差異を考えるにあたって、〈全体〉の概念が必然的に要請されるとイポリットが考えているということである。実のところ「全体／全体性」の概念は、『論理と実存』をはじめとしてイポリットが、一貫して

---

16 *Ibid.*, p. 143.

17 *Ibid.*, p. 146, p. 153.

18 *Ibid.*, p. 148. イポリットは « différence intérieure » と « différence interne » の語をともに用いているが、指し示される内容は同じであるため、どちらも「内的差異」と訳すこととする（この点については、註 17 で指示した箇所も参照のこと）。

こだわり続けたものである。その点はこの後すぐの箇所で見ることとしよう。

以上の議論に続ける形でイポリットは、先に触れた絶対的原理＝二つの秩序と関連して、ベルクソンにおける二元論と一元論の「和解（conciliation）」の問題に触れる。既に見た通りイポリットは、第二種の秩序＝不活性なものの秩序を、第一種の秩序＝生命的なものの秩序の「否定」だと主張していた。しかしその一方、ベルクソンにおいて「反対は真ではない」。つまり、第二種の秩序を否定したところで、第一種の秩序が出てくるわけではない。ここからイポリットはベルクソンの哲学について「あるときは一元論で、またあるときは二元論で、その和解が考えられない[19]」という批判を打ち出してくる。

ここまでの文脈だけを勘案すると、一元論と二元論についての議論は、やや唐突に差し込まれたかのように見える。実のところ、これまで見てきたベルクソンに対する諸々の批判は、『生成と構造』から『論理と実存』に至るまでイポリットが構築してきたヘーゲル像と、密接な関係を持っている。『生成と構造』の冒頭でイポリットは、まさしく否定性こそが、感覚的確信から絶対知に至るまで、意識が上昇してゆくことを可能にする当のものであり、創造的価値を持つと強調している。ここで否定性とは、意識が自らの真理を失ってゆく過程であり、それが意識をして感覚的確信から知覚へ、知覚から悟性へと移行を促すわけである。

しかし、どうして否定性は新しいものを生みだすと考えられるのか。たとえば感覚的確信から知覚への移行は、どうして上昇だと言えるのか。こうした疑問に答えるためには〈全体〉の概念が必要不可欠であるとイポリットは考える。

> […]〈全体〉が意識の発展のうちに、常に内在しているということを認めなくてはならない。否定が創造的であるのは、定立された項が切り離されたものだったためであり、その項自身があるひとつの否定だったからである。したがってその項の否定は、その項がもつ細部のうちで、〈全体〉を再び見出すことを可能にするということが分かる。このように〈全体〉が意識に内在することがなかったならば、いかにして否定がある内容を実際に生み出すことができるのか、理解することは出来ないだろう[20]。

〈全体〉の概念を導入することは、ある項がその〈全体〉に対して位置づけられる、もっと言えばその「否定」として考えられることを意味する。したがってその項の否定は、全体に対す

---

[19] *Ibid.,* p. 149.

[20] Jean Hyppolite, *Genèse et structure de la* Phénoménologie de l'esprit *de Hegel*, Paris, Aubier-Montaigne, 1946, p. 20 (『ヘーゲル精神現象学の生成と構造』市倉宏祐訳、岩波書店、1972 年、上巻、18-19 ページ).

る否定の解除、すなわち否定の否定を意味する。この意味で否定性は、新しいものを生みだすと言えるのである。

否定性と全体との関わりは、『エンチクロペディー』で展開されるような、「ロゴス、自然、精神」の三項からなるヘーゲル哲学体系において、その完成形を見るとイポリットは考える。『生成と構造』の末尾[21]においてイポリットは、自然とロゴスの両者が〈全体〉であるとしつつ、一方でロゴスを「自然としての自己を否定した〈全体〉」として、他方の自然を「ロゴスとしての自己を否定した〈全体〉」として、それぞれ定義する。ここで〈全体〉は、精神や普遍的なもの、〈絶対者〉とも言いかえられつつ、それとして自らの姿をあらわすことがない。精神としての〈全体〉は、ロゴスと自然の相互反照のうちで、はじめて姿をあらわすものなのである。

ここで重要なのは、自然を否定すればロゴスが、ロゴスを否定すれば自然が、それぞれ出てくるということである。今回扱った『論理と実存』第 II 部第四章の直前の第三章「同一性と矛盾としての絶対知 ── ロゴス、自然、精神」においてイポリットは、『生成と構造』の末尾の議論を踏襲しながら、次のように述べる。「私が自然を否定したならば、私はロゴスしか手に入れることがない。なぜならば自然にとってロゴスは自らの他者であり、ロゴスにとって自然は自らの他者だからである[22]」。自然の否定によってロゴスを新たに手に入れることができるということ、このことを「思弁的否定」と名指しつつイポリットはそれを、否定の持つ創造的価値を示す最たる例として我々に提示する。

これまでの議論を振り返ってみると、『論理と実存』第 II 部第四章におけるベルクソン批判は、大きく分けて以下の二つの点にあったといえる。第一に、諸々の個物の関係＝差異を、否定性抜きに考えることは果たして可能なのか。結局のところベルクソンは、『創造的進化』における生の分化や二つの秩序の議論のなかで、二元性という形で否定性の議論を密かに再導入しているのではないか、とイポリットは指摘している。

第二にベルクソンの哲学において、二元論と一元論がどのように和解しうるのか。たとえば『創造的進化』の二つの秩序の議論において、それらが同じ一つの生の分化した姿であるということを、ベルクソン哲学の枠内でどのように正当化しうるのか。この問題を解くにあたってもまた、ヘーゲルにおけるロゴスと自然の関係がそうであるように、否定性の概念に依拠せざるを得ないとイポリットは考えている。

---

[21] *Ibid.*, p. 579-582 (同書、下巻、398-401 ページ).

[22] Jean Hyppolite, *Logique et existence, op. cit.,* chapitre III « Le savoir absolu comme identité et contradiction. Logos, Nature, Esprit », p. 130.

## 2. 諸々の個物の関係＝差異を否定性抜きに考えることは可能か ──「ベルクソン、1859-1941」と「ベルクソンにおける差異の概念」（1956 年）

第 1 節で触れた通り、1956 年に書かれた二つのベルクソン論は、『論理と実存』で展開されたイポリットの哲学に対抗する強い意志を持って書かれたものだと言える。ドゥルーズが同書の書評で提示した「矛盾にまで至らないような差異の存在論[23]」をドゥルーズは、ベルクソン哲学に依拠しながらまずもって構築してゆくこととなる。

差異の存在論の構築というドゥルーズの試みを読み解くために、手がかりとなるのが「直観」と「持続」である。よく知られているようにドゥルーズは、ベルクソン哲学の方法としての直観を重要視しており、今回扱うベルクソン論のいずれにおいても、それが最初に検討される。直観の役割としてドゥルーズが一貫して強調するのが、持続との関係、問題の定立＝提起（正しい問題と偽の問題の判別）と並んで、本性の差異の発見に他ならない。これら三つの特徴は、ベルクソン自身が折に触れて強調するものであって、たとえば『思考と動き』の「序論（第二部）　問題の提起について」[24]において、凝縮された形で提示されている。

時間と空間、質と量、そして前節で確認した二つの秩序はまさに、ベルクソン自身が本性の差異を持つものとして提示しているものである。本性の差異に関してドゥルーズは、ベルクソン自身の議論を、基本的には踏襲していると見てよい。一方、ドゥルーズの議論の独自性は、本性の差異の発見は必要不可欠であることを強調しながらも、それだけでは十分ではないと見なす点から始まってゆく。そのうえでドゥルーズは、持続に対する極めてオリジナルな定義を与えつつそれを、差異の存在論の原理として位置づけることとなる。

その点を確認するために、「ベルクソンにおける差異の概念」、とりわけその前半部を精読することとしよう。そこでドゥルーズは、差異にまつわる諸々の概念をカップルの形で登場させ、それらを腑分けしながら議論を展開してゆく。はじめにドゥルーズは、ベルクソンにおける差異の哲学が、「方法論的平面」と「存在論的平面」の二つに関わると指摘する。一方の方法論的平面における差異に関わるのが、本性の差異である。他方でドゥルーズは、存在論的平面における差異について、次のように述べている。

---

[23] Gilles Deleuze, « Jean Hyppolite, *Logique et existence* », *L'île déserte et autres textes. Textes et entretiens 1953-1974*, édition préparée par David Lapoujade, Paris, Minuit, 2002, p. 23 (「ジャン・イポリット『論理と実存』」松葉祥一訳、ダヴィッド・ラプジャード編『無人島　1953-1968』河出書房新社、2003 年、29 ページ).

[24] Henri Bergson, *La pensée et le mouvant*, Paris, PUF, 2013, chapitre II « Introduction (deuxième partie). De la position des problèmes » (『思考と動き』原章二訳、平凡社、2013 年、第二章「序論（第二部）　問題の提起について」).

> もし諸事物の存在がある仕方でそれらの本性の差異のうちにあるのならば、我々は差異それ自体がなにものかであるということ、それがある本性を持つということ、そしてついにはそれが我々に〈存在〉を引き渡してくれるであろうことを期待できるだろう[25]。

この、なにものかとしての差異をドゥルーズは、本性の差異をひっくり返した形で、「差異の本性（la nature de la différence）」という表現で呼んでいる。

それ以降のドゥルーズの議論は、本性の差異では十分ではなく、差異の本性へと移行しなければならない、という点に沿って展開してゆく。以上の点を明らかにするためにドゥルーズが新たに導入するのが、「外的差異／内的差異」の対に他ならない。まずは内的差異についての、ドゥルーズによる定義を確認しよう。

> もっとも重要なものを判別するためには、哲学の目的について熟考しなくてはならない。哲学が諸事物と直接的で肯定的な関係を持つのは、以下の場合に限りにおいてである。すなわち哲学がある事物を、それが何であるのかを起点として、その事物でないすべてとの差異において、すなわち[その事物の]内的差異において、把握することを目指す限りにおいてである[26]。

ここでは哲学の目的として、ある事物について「それが何であるか」を把握することが挙げられ、それを規定するのが「内的差異（différence interne）」だとされる。ここで内的差異は、「その事物でないすべてとの差異」と定義されている通り、前節で確認したイポリットの用語法を強く踏まえたものである[27]。その事物が「何であるのか」を示すという内的差異の規定も、イポリットがそれを本質の差異と言いかえていたことが想起されるだろう。

この内的差異の概念を起点としてドゥルーズは、本性の差異では不十分だと述べる。本性の差異は「いまだ外的差異（différence externe）である[28]」、つまり本質の差異の段階には至ってい

---

[25] Gilles Deleuze, « La conception de la différence chez Bergson », *L'île déserte et autres textes.*, *op. cit.*, p. 43 (「ベルクソンにおける差異の概念」前田英樹訳、『無人島　1953-1968』、前掲書、63 ページ).

[26] *Ibid.*, p. 44 (同書、64 ページ).

[27] この点については、すでにビアンコの研究が、明確で適切なまとめを行っている（cf. Giuseppe Bianco, *Après Bergson. Portrait de groupe avec philosophe*, *op. cit.*, p. 292-301）。それに対して本稿は、内的差異が全体性に関係することを強調したうえで、内的差異の概念を梃子にしつつドゥルーズが、全体性と差異の概念を書き換えようとしていること、その操作の結果として潜在性の概念が提出されること、これらを示すことに新規性がある。

[28] Gilles Deleuze, « La conception de la différence chez Bergson », art. cit., p. 51 (「ベルクソンにおける差異の概

ない。一方で彼は、本性の差異が「あらゆるものの鍵であって、そこから出発し、まずもってそれらを見つけ出さなくてはならない[29]」と強調する。そこで課題となるのは、本性の差異から出発して、いまだ外的差異であるそれを、内的差異へともたらすことである。

本性の差異の役割と限界を見極めるべくドゥルーズは、「混合物／傾向」という新たな対を持ち出す。いわく、「本性上異なるもの、それは事物でも事物の状態でも特性でもなく、諸々の傾向である」。ここで事物は、諸々の傾向の「混合物」として与えられる。こうした事物＝混合物の視点においては、「何ものも、何ものと、本性上異なっていない」。

この「混合物／傾向」の議論においては、とりわけ『創造的進化』の議論が参照されている。同書でベルクソンは、「植物と動物を厳密に分ける特徴はない」と述べる一方、「動物と植物が躍進してきた二つの分岐する傾向」があることを強調する。『創造的進化』においては、動物と植物、本能と知性とが、本性上異なる（つまり本性の差異を持った）傾向として提示される。この議論に則ると、食虫植物は例えば、他の植物に比べてより多く動物の傾向を持った植物として理解される。ここからドゥルーズは、次のように述べる。「存在は、ある傾向の表現である。一方でその傾向は、別の他の傾向によって妨げられている。したがって、直観は自らを差異ないし分割の方法として提示する。すなわち、混合物を二つの傾向に分けること[30]」。

一方でこうした混合物の分割は、差異の哲学の構築という観点からすれば、袋小路に陥るとドゥルーズは指摘する。『創造的進化』の議論に戻るならば、動物の行動は本能を、人間の行動は知性を、それぞれ支配的傾向として示す。それでは、この支配的傾向はどのように決まるのか。「二つの傾向について、どちらが良い傾向なのだろうか」。この問題は、例えばプラトンのように「超越論的善のイデアがより良い方の選択を導いてくれる」といった具合に考えない限りは、解決が出来ないように思われる。

これに対してドゥルーズは、ベルクソンが「あたかも差異の方法がそれだけで足りることを欲したかのように」振舞ったのだと述べる。この、「それだけで足りる差異の方法」が存在することを指し示しているのがまさに、持続にほかならない。

> しかし、ベルクソンの著作における持続についてのすべての定義、描写、特徴を考え合わせるならば、最終的に本性の差異は、二つの傾向のあいだにはないということが気づかれる。最終的に、本性の差異は数ある傾向のうちのひとつであって、他の別の傾向と対立し

念」、前掲論文、73 ページ).

[29] *Ibid.*, p. 44 (同書、65 ページ).

[30] *Ibid.*, p. 48-49 (同書、70 ページ),

> ている。それでは、持続とは何であるか。ベルクソンが持続について述べていることは常に、以下に帰着する――持続、それは自らと異なるものである。反対に物質は、自らと異ならないもの、反復するものである[31]。

二つの傾向の本性の差異と言った場合、たとえば動物と植物のように、差異以外の別のものが前提されていて、そこでは「差異の方法がそれだけで足りる」とはならない。一方、ドゥルーズによれば持続は「自らと異なるもの」、いわば差異の差異である。持続は自らと異なることを通じて、本性の差異を世界にもたらすことができる。その一方で物質は「自らと異ならず、反復する」、つまりは程度の差異しかもたらすことができない。したがって本性の差異は、持続の側にのみ存在している。

こうした持続をドゥルーズは「事物となった差異」と呼ぶ。つまりは持続こそが差異の本性にほかならず、持続にいたるということが「外的差異から内的差異への移行」にあたる。そのうえで、持続に代表されるようなベルクソン哲学の独創性はまさに「内的差異は、矛盾や否定的なものにまで至らないし、また至ってはならない[32]」ことを示した点にあるのだとドゥルーズは述べる。

ここまで見てきた議論がイポリットのそれを強く意識しているということは、もはや明確だろう。しかしながら我々は、イポリットの定義した内的差異の概念が、他の諸々の事物との差異、そして宇宙の全体との差異であることを確認したはずである。一方で持続は、個体のそれぞれに当てはまるものである。例えば『思考と動き』などにおいて、ベルクソン自身が持続を全体として定義している箇所があるにせよ、両者の間で全体の概念は、そもそも指し示すオーダーがまったく違うのではないだろうか。

以上の疑問に答えるかのようにドゥルーズは、『試論』における持続の概念と『創造的進化』における〈生〉の概念を、重ね合わせる作業を行う。持続と〈生〉の同一性とはすなわち、自己差異化しながらひとつの全体を形づくる、ということに他ならない。このようにして手に入った〈生〉としての全体は、イポリットが述べる全体に匹敵するようなそれであると言える。生としての全体は、自らと異なる作用を通じて、自らの本性を変えつつ、さまざまな進化の線を生みだしてゆく。そしてこの場面においてドゥルーズは、持続と〈生〉の概念が一致して示す「自己差異化する全体」を、潜在性として指し示している[33]。

---

[31] *Ibid.*, p. 51 (同書、73 ページ).
[32] *Ibid.*, p. 53 (同書、76 ページ).
[33] cf. *Ibid.*, p. 53-56 (同書、76-80 ページ). 実のところドゥルーズが「潜在的／性」の語を用いるのは、この箇所がはじめてである。つまりドゥルーズが「潜在的／性」の語を導入するのは、『物質と記憶』の議論の

以上の全体の概念に依拠しつつドゥルーズは、イポリットに対して再び戦いを挑む。その批判が凝縮された一節を引用してみよう。

> ベルクソンにおいて、潜在的なものの概念のおかげで、事物は自らとまずもって無媒介に異なる。ヘーゲルによれば、事物が自らと異なるのは、まずもってそれが自分でないすべてと異なるためであり、したがって差異は矛盾にまで到る。ここでの我々にとって、反対と矛盾との区別は重要ではない。矛盾とは、ある全体が反対のものとして提示されることであるのに過ぎないのだから[34]。

ここでドゥルーズは、内的差異の概念を梃子にしながら、差異と全体の概念そのものを作り変えていると言える。一方のヘーゲル＝イポリットにとっては、まずもってある全体が存在し、その全体から諸々の事物が規定される、すなわちその内的差異が決まる。他方のベルクソン＝ドゥルーズにとって、最初に与えられているのは差異に他ならない。この差異の差異化の運動があってはじめて、一つの全体が形づくられてゆく。

こうした議論の展開の仕方は、「ベルクソンにおける差異の概念」のみならず、「ベルクソン、1859-1941」にも共通している。二つの論文においてドゥルーズは、直観＝本性の差異の発見から出発して、差異の差異としての持続に至ったうえで、それを『創造的進化』における生の概念へと重ね合わせる（直観→持続→生）。一方でドゥルーズはこれらの論文において、『物質と記憶』を軽視しているわけでは決してない。ベルクソンの記憶の議論に依拠しつつドゥルーズは、潜在性のもう一つの姿を打ち出しつつ、イポリットの読解するヘーゲルに対抗している。

そこでドゥルーズが特権視するのが、記憶の逆円錐の図である。ベルクソンの記憶力論において、同じ対象を前にしても複数の知覚の回路が成り立ちうるのは、記憶力が異なる仕方で加入することによって、すなわち記憶力が異なるイマージュ記憶を対象に貼りつけるためである。ベルクソン自身は、「外国語の単語を聞く」を例として挙げている。「ある外国語の単語が私の耳に向かって口にされた場合、その言語一般が思い浮かぶこともあれば、かつてその単語をある仕方で発音した声が思い浮かぶこともある[35]」。

他方でベルクソンは、記憶力が介入する場面においては常に、同じ一つの記憶が問題となると強調する。「我々の想定では、我々の人格のすべてが、我々の記憶の全体（la totalité de nos

---

整理を第一の目的としてではなかった、と考えられる。

[34] *Ibid.*, p. 58 (同書、82 ページ).

[35] Henri Bergson, *Matière et mémoire*, Paris, PUF, 2008, p. 188 (『物質と記憶』杉山直樹訳、講談社学術文庫、2019 年、245 ページ).

souvenirs）を携えながら、現在の知覚へと、分かたれないまま入り込んでいくのであった[36]」。それでは記憶力は、いったいどのようにして異なる仕方で介入しうるのか。このことを説明するのが、記憶の逆円錐の図に他ならない。すなわち記憶は、さまざまな収縮と弛緩の度合を持つことができ、それによって異なるイマージュ記憶を知覚に貼り付けることが可能になっている。したがって問題となるのは常に、同じ一つの記憶のさまざまな収縮と弛緩の仕方である。そうした収縮と弛緩のさまざまな度合は、記憶の逆円錐の各々の断面図、すなわち「意識の諸平面」として提示される[37]。

以上のようなベルクソンの記憶力論を背景にドゥルーズは、度合としてのさまざまな差異の共存として潜在性の姿を描き出そうとしている。「ベルクソン、1859-1941」においては、以下のように定式化が為されている。

> 有名な円錐のメタファーは我々に、以下のことを述べている。円錐の各々の水準には、我々の過去の全体が、しかし異なる度合で存在している。現在はただ、過去の最も収縮した度合である。[…]各々の度合に全体が存在する。しかし全体は全体と、すなわち残りのすべての度合と共存している。それゆえ我々はついに、潜在的なものが何であるかがわかる。潜在的なものとは、それとしてそれ自体で共存する、諸々の度合である[38]。

円錐の断面の各々は、過去の全体を、それぞれが異なる収縮の度合でもって表現している。したがって記憶の逆円錐が示しているのは、さまざまな度合を持った差異が、それとして共存しているという姿である。

度合としてのさまざまな差異の共存という潜在性の定義もまた、ヘーゲル＝イポリット的な否定性と全体に対する、強力なアンチテーゼになっていることが確認できるだろう。意識の断面の各々は、互いに対立や矛盾の関係におかれることなく、それぞれが全体を異なる収縮の度合で表現しつつ、同じ全体を形づくる、つまりは互いに関係を持つのである。

---

36 *Ibid.*, p. 184 (同書、240 ページ).

37 『物質と記憶』の議論に戻るならば、現在＝行為に近づくような記憶力の緊張度が「収縮」と、過去＝純粋記憶に近づくようなそれが「弛緩」と、それぞれ整理することができる。記憶の逆円錐 SAB で考えると、頂点 S に近づくことが収縮で、底面 AB に近づくことが弛緩である。この観点からベルクソンは、最も収縮度が高い頂点 S を「行為の平面」と、最も弛緩度の高い底面 AB を「夢の平面」と、それぞれ名付けている。cf. *Ibid.*, p. 185-192 (同書、241-249 ページ).

38 Gilles Deleuze, « Bergson, *1859-1941* », *L'île déserte et autres textes.*, *op. cit.*, p. 39-40 (「ベルクソン、1859-1941」前田英樹訳、『無人島　1953-1968』、前掲書、56-57 ページ).

### 3. 二元論と一元論の調和 ── 『ベルクソニズム』（1966 年）

さて今度は、1966 年に書かれた『ベルクソニズム』の議論を検討してみよう。しばしば先行研究では、1956 年に書かれた二つのベルクソン論と『ベルクソニズム』の間で、基本的な論旨の変更は存在しないと考えられてきた[39]。一方で『ベルクソニズム』には、『持続と同時性』について扱った第四章が存在するなど、上の二つのベルクソン論と比べて、少なくない異同が見受けられる。

とりわけ本稿が注目するのは、冒頭で提示した二つの点である。第一に両者の間では、扱われるベルクソンの著作とその概念の順番が異なっている。1956 年の時点でのドゥルーズの議論は、「直観→持続→生→記憶」の順番で展開していった。一方、1966 年の『ベルクソニズム』におけるドゥルーズは、第一章で直観を、第二章で持続を、第三章で記憶を、第五章で生／生の飛躍を、それぞれ扱っている（つまり「直観→持続→記憶→生／生の飛躍」）。

第二に『ベルクソニズム』におけるドゥルーズは、「潜在性／現働性」の対を、一貫して強調し続ける。とりわけ特徴的なのは、記憶を扱った『ベルクソニズム』第三章の後半部[40]の議論である。ここでドゥルーズは、潜在的なものとしての記憶が、どのようにして現働化するのか、すなわち現在の知覚にとって有用なものとなるのか、そのプロセスについての綿密な議論を展開する。こうした議論は、「ベルクソン、1859-1941」や「ベルクソンにおける差異の概念」では見出されず、また『ベルクソニズム』と違ってこれらの論文では、「現働化する（s’actualiser）」が記憶に関わるそれとして術語化されていない。

以上の二つの違いを本稿では、イポリットがベルクソンに差し向けた二つの批判のうちのひとつ、「二元論と一元論の両立」の問題と関連付けて考えてみることにしたい。ドゥルーズ自身が強調してきた通り、ベルクソン哲学に特徴的なのは二元論、つまり時間と空間に代表されるような本性の差異の発見であり、そのためにこそ直観という方法が要請されるのであった。

一方でベルクソンは、『物質と記憶』第四章や『創造的進化』において、こうした二元論を収縮／弛緩の語に依拠しながら、いわば一元論化しているように思われる。『ベルクソニズム』第一章でドゥルーズはこれを、「切り分け（découpe）」に対する「再交差（recoupement）」と表現

---

[39] cf. 前田英樹「訳者まえがき」、アンリ・ベルクソン『記憶と生』ジル・ドゥルーズ編、未知谷、1999 年、1 ページ。加賀野井秀一「はじめに ── ドゥルーズの出発点　若きドゥルーズへの遡行」、ジル・ドゥルーズ編著『哲学の教科書 ── ドゥルーズ初期』、河出文庫、2010 年、19 ページ。本稿で度々触れてきたビアンコの研究では、「ベルクソンにおける差異の概念」と「ベルクソン、1859-1941」（とりわけ前者）についての議論が中心となっており、『ベルクソニズム』に対する言及がほとんどない。

[40] Gilles Deleuze, *Le bergsonisme*, Paris, PUF, 1966, chapitre III « La mémoire comme coexistence virtuelle », p. 58-70 (『ベルクソニズム』檜垣立哉・小林卓也訳、法政大学出版局、2017 年、第三章「潜在的共存としての記憶」、65-77 ページ).

している[41]。しかしながらベルクソンは、あらゆるものを程度の差異や強度の差異のうちで理解しようとする科学や古典哲学の誤りを告発するためにこそ、本性の差異について強調してきたはずである。つまり、収縮と弛緩の一元論は、自身が批判した程度の差異ないし強度の差異へと、再び逆戻りすることを意味してはいないだろうか。

こうした問題を『ベルクソニズム』におけるドゥルーズは、「弛緩と収縮の間で、程度の差異と強度の差異以外のどのような差異が、あり得るのだろうか」と自ら提起する。この問題が避けて通れないのは、物質を持続の弛緩＝「劣化（dégradation）」と定義することが、物質を持続の限定／否定／対立と考えることへと、容易に繋がってしまうからである。「最悪の矛盾が、体系の内部に起こってしまっているように思われる。諸々の程度、強度、対立、これらすべてが再導入されてしまっている[42]」。

以上の問題に対して正面から解答を与えようとするのが、「異化＝分化としての生の飛躍」と題された『ベルクソニズム』第五章である。そこでドゥルーズは、この問題を一元論のそれとしてではなく、「本性の差異の二元論と弛緩の程度の一元論、両者の間の調和」の問題として、あるいは「方法あるいは経験の転回の二つの『向こう側』、両者の間の調和」の問題として、考えなくてはならないと強調する。すなわち課題となるのは、一元論のうちで二元論を強引に処理しようとすることではなく、「二元論の契機を除去することなく、その意味を完全に持たせたまま」、二元論と一元論を両立させることを、ベルクソン哲学のうちで可能にすることである[43]。

ここでドゥルーズは、これまでの議論で出てきた諸々の契機を総括しつつ、それらをより深い次元で統合することを提案する。『ベルクソニズム』のこれまでの議論においては、三つの契機が提示されていた。第一のそれが「純粋な二元論の契機」であって、それがベルクソン哲学の出発点となるような、直観を用いた本性の差異の発見に対応する。第二の「中性化された／補正された二元論の契機」は、差異の差異としての持続の発見に該当する。つまり、空間と時間の二元論において、一方の側、すなわち時間＝持続のみが「あらゆる本性の差異を引き受ける」という点で、純粋な二元論が中性化／補正されている。そして第三の契機が、収縮／弛緩を用いた「一元論の契機」である。この観点からは、「持続は物質の最も収縮された度合に過ぎず、物質は持続の最も弛緩した度合である」。

こうした三つの契機は、『ベルクソニズム』だけでなく、「ベルクソン、1859-1941」や「ベル

---

41 *Ibid.*, p. 19-21 (同書、21-23 ページ). なお「ベルクソン、1859-1941」においても、同様の記述が存在する。cf. Gilles Deleuze, « Bergson, *1859-1941* », art. cit., p. 37 (前掲論文、52 ページ).

42 Gilles Deleuze, *Le bergsonisme*, *op. cit.*, p. 74 (『ベルクソニズム』、前掲書、82 ページ).

43 *Ibid.*, chapitre V « L'élan vital comme mouvement de la différenciation », p. 92-93 （同書、第五章「分化の運動としてのエラン・ヴィタール」、101-102 ページ）.

クソンにおける差異の概念」においても、同じ順序で見出される。一方でドゥルーズは、これら三つの契機を統合する第四の契機を、『ベルクソニズム』第五章において新たに付け加えることとなる。そこで鍵となるのが、「潜在性／現働性」の対に他ならない。

> 方法の諸契機としての一元論と二元論の間に、矛盾は存在しない。なぜならば二元性は、現働的な諸傾向の間にのみ、経験の第一の転回の彼方へと到達する、現働的な諸々の方向の間にのみ、あてはまるものだからである。一方で統一は、第二の転回のうちでなされる。あらゆる度合、あらゆる水準の共存は潜在的なものであり、ただ潜在的なものである。統一の地点はそれ自体潜在的である[44]。

経験の第一の向こう側、それが本性の差異を見つけ出すことであった。一方でこの第一の向こう側は、「現働的な二つの傾向」にのみ適用されるものである。経験の第二の向こう側が存在し、それは現働的なものと区別されるところの「潜在的なもの」にかかわる、とドゥルーズはここで述べている。

『ベルクソニズム』第五章でドゥルーズが取った戦略はまさに、「二元論と一元論の調和」の問題を、潜在性と現働性のそれとして読みかえるというものである。すなわち、潜在性＝一元論の契機が、現働性＝二元論の契機を「異化＝分化する[45]」、言い換えれば「生み出す」と考えることで、二元論と一元論が両立すると考えるわけである。「先の三つの契機に対して、したがって第四の契機を付け加えなくてはならない。すなわちそれは、再発見された二元論、支配された二元論、そしてある種生み出された二元論の契機である[46]」。

潜在性が現働性を生み出すという図式を強調するにあたってドゥルーズは、潜在性と全体性の関わりを、ふたたび強調することになる。『ベルクソニズム』第五章において両者の関わりが説明されている三つの箇所を、順番に確認していこう。第一にドゥルーズは、ベルクソンにおける〈全体〉の語が意味を持ったものであること、しかしその全体は現働的なものでなく潜在的なものであること、をある註で示唆する[47]。この点はベルクソンが、「すべては与えられていない（Tout n’est pas donné）」と繰り返し述べつつ、一方で随所で〈全体〉の語に依拠し続けたと

---

[44] *Ibid.*, p. 95 (同書、104 ページ).

[45] « Se différencier »の語に対して我々は、「ベルクソンにおける差異の概念」の文脈においては、「自己差異化する」という訳語を当てた。『ベルクソニズム』においては、潜在性の次元がそれとして存在しており、それが現実に姿をあらわす場面で用いられるのが上の動詞である。『創造的進化』における生の分化の議論が念頭に置かれていることにも鑑みて、ここでは「異化＝分化する」と訳すこととする。

[46] Gilles Deleuze, *Le bergsonisme*, *op. cit.*, p. 96 (『ベルクソニズム』、前掲書、105 ページ).

[47] *Ibid.*, p. 95, n° 2 (同書、原注 130).

いう事実を説明することに役立つ。

第二にドゥルーズは、生の飛躍に即して次のように述べる。「生の飛躍について話すとき、ベルクソンは何を言おうとしているのか。問題となるのは常に、現働化しつつある潜在性、異化＝分化しつつある単純性、自らを分割しつつある全体性である[48]」。ここでドゥルーズは、『創造的進化』における「生命は諸要素の結合や累積によって進行するのではなく、分離と分岐によって進行する[49]」という文言に依拠する。「分離と分岐によって」ということはすなわち、その母体となる全体性がまずもって存在して、それが「自らを分割する」のが進化という現象だということに他ならない。すなわち生という全体が、動物／植物や本能／知性へと、自らを分割してゆく図式が念頭に置かれている。

第三にドゥルーズは、潜在性を「始原的な全体」として定義するに至る。

> 異化＝分化はなぜ「現働化」なのか。それは異化＝分化がある統一性、ある潜在的な始原的全体性（une totalité primordiale virtuelle）を前提としているからである。そうした統一性／全体性は、異化＝分化の諸々の線にしたがって自らを分離してゆくが、それら統一の各々の線上において、自らに存続する統一性と全体性とを示している[50]。

ここでドゥルーズは、『物質と記憶』を参照軸とする「現働化」と、『創造的進化』に依拠する「異化＝分化」とが、「ある潜在的な始原的全体性」を前提するという意味で共通点が見出せることを指摘している。一方の『物質と記憶』でベルクソンは、私の記憶が常にその全体を携えて作用しており、したがって全体のほうから出発して諸部分へと「解体」されるということを強調する。観念連合説を批判する文脈でベルクソンは、次のように述べていた。「したがって連合は最初の事実ではない。我々の出発点は、分解なのである[51]」。

他方の『創造的進化』において、前提される始原的全体性とはまさしく〈生〉に他ならない。実際、進化の分岐先の各々（＝植物と動物、本能と知性）は、「ある観点から、自らと共に全体を持ち運んでいる」。その証左として、植物のなかにはわずかな動物的なものが、動物のなかにはわずかな植物的なものが、それぞれあると言える（その代表的な例が食虫植物であった）。

この、始原的な全体としての潜在性という定義こそが、潜在性が現働性を生み出すという図式を可能にしつつ、一元論と二元論の契機を矛盾なく両立させている当のものである。潜在性

---

48 *Ibid.*, p. 96 (同書、105 ページ).
49 Henri Bergson, *L'évolution créatrice*, *op. cit.*, p. 90 (『創造的進化』、前掲書、111 ページ).
50 Gilles Deleuze, *Le bergsonisme*, *op. cit.*, p. 97 (『ベルクソニズム』、前掲書、106 ページ).
51 Henri Bergson, *Matière et mémoire*, *op. cit.*, p. 184 (『物質と記憶』、前掲書、239 ページ).

が始原的な全体であるからこそ、現働的なものがそこから生み出されることが可能になる（ここでは『創造的進化』における生の議論が効いている）。

潜在性／現働性の対を一貫して強調したうえでドゥルーズは、現働性の次元にのみ着目することが、諸々の個物の関係を「否定」として考えることにつながることを指摘する[52]。こうしたドゥルーズの議論の射程を理解するためには、潜在性と現働性との関係について、改めて考え直す必要があるだろう。『創造的進化』に戻るならば、諸々の現働的なもの、進化の分岐先である動物や植物、本能と知性は、それらを生み出した母体である〈生〉とは、まったく異なるものである。一方、我々に与えられているのは常に、諸々の現働的なものでしかない。したがって始原的な全体としての〈生〉は必ず、自らの姿を変えつつ、我々の前に現れることとなる。『ベルクソニズム』でドゥルーズが「異化＝分化（différenciation）」と名指すのはまさに、こうした潜在性の変身のプロセスに他ならない。その意味で、ドゥルーズが強調する通り「異化＝分化」は常に、否定や限定には決して回収されない「差異（différence）」の契機だと言える。

**おわりに**

ここまで我々は、『論理と実存』第 II 部第四章におけるイポリットの二つのベルクソン批判を背景としながら、初期ドゥルーズのベルクソン論を読解してきた。その結果として我々は、まさしくイポリットに対抗することを目的として、ドゥルーズが潜在性の概念を練り上げていったことを確認するに至った。1956 年の二つのベルクソン論においてドゥルーズは、諸々の個物の差異を否定性抜きに考えることができるのかというイポリットの第一の批判に応答するべく、持続と生を重ね合わせることを通じて、(1)「自己差異化する全体」として潜在性の概念を打ち出す。続けてドゥルーズは、ベルクソンの記憶力論、とりわけ記憶の逆円錐の図に注目しながら、(2)「度合としてのさまざまな差異が共存する全体」としての潜在性の姿を、新たに描き出す。そして 1966 年の『ベルクソニズム』でドゥルーズは、二元論と一元論の両立というイポリットが提起した第二の批判に取り組みながら、今度は記憶と生を同一視することによって、(3)「始原的な全体性」としての潜在性とその「異化＝分化」の図式を取り出すこととなる。

これら三つの潜在性の概念はいずれも、全体性と差異を軸として展開されているということを、改めて強調しておきたい。かかる潜在性の概念は、イポリットの批判に答えてベルクソンを擁護するだけでなく、ヘーゲル＝イポリットの哲学に対抗しながら、ベルクソン哲学を用いて全体性と差異の概念を書き換えることを目指すものであったと、我々は述べることができるだろう。

---

[52] Gilles Deleuze, *Le bergsonisme*, *op. cit.*, p. 105 (『ベルクソニズム』、前掲書、114-115 ページ).

# Totalité, différence et virtualité
# La lecture deleuzienne de Bergson comme réponse à Jean Hyppolite

**Tomotaro HASEGAWA**

Selon la formule célèbre d'Alain Badiou, Gilles Deleuze a toujours été considéré comme un « magique lecteur de Bergson ». La relation d'affinité entre deux philosophes est toutefois remise en question par des études récentes. Étant donné que l'interprétation deleuzienne de Bergson ne s'avère ni neutre ni objective, nous serons amenés à repérer ce qui le conduit à développer sa propre interprétation de ce philosophe. Nous nous proposerons dans cet essai de nous référer à Jean Hyppolite afin de montrer que la lecture deleuzienne de Bergson constitue une réponse à celui-ci.

Nous commencerons par étudier le quatrième chapitre de la deuxième partie de *Logique et existence* pour en dégager deux critiques qu'Hyppolite adresse à Bergson. Les deux s'affrontent autour de la question de savoir si la chose elle-même implique de la négation ou pas. En montrant que Bergson introduit subrepticement celle-ci dans sa propre philosophie, Hyppolite soulève deux problèmes. Premièrement, il serait impossible de réfléchir sur la différence entre les individus sans recourir à la négation. Deuxièmement, Bergson n'arrive pas à concilier le monisme et le dualisme.

Nous passerons ensuite aux analyses de deux articles que rédige Deleuze en 1956, « Bergson, *1859-1941* » et « La conception de la différence chez Bergson ». L'examen du concept de « différence interne » nous conduira à mettre au jour le fait qu'ils s'articulent autour du premier problème. En identifiant la durée à la vie, Deleuze élabore d'une part la notion de virtuel qui se différencie pour former un tout. D'autre part, il s'appuie sur la théorie bergsonienne de la mémoire en vue de préciser ce qui est virtuel : la coexistence des différents degrés dans un tout.

Nous examinerons enfin *Le bergsonisme* que publie Deleuze en 1966. En répondant au deuxième problème, Deleuze introduit la distinction nette entre le virtuel et l'actuel. Tandis que le virtuel correspond au moment du monisme, l'actuel équivaut à celui du dualisme. Le virtuel se définit comme totalité primordiale, si bien qu'il faut penser la manière dont il apparaît dans la réalité : il doit s'actualiser ou se différencier.